

小竹貝塚-貝で装-

1. 小竹貝塚のあらまし

小竹貝塚は日本海側最大級の縄文時代前期（約6,000～5,000年前）の貝塚で、呉羽丘陵北端に広がる台地の北西側山裾から平野にかけて位置します（富山市呉羽町北地内、標高約4m）。

新鍛冶川改修工事に伴い、平成20～22年に富山市教育委員会が調査を行いました。平成20年度調査区では、最大1.5m堆積した貝層を検出し、3体の埋葬人骨を検出しました。貝層の南側には高台があり、平成21・22年度調査区では竪穴住居や土坑など、居住域の遺構を検出しました。



2. 貝層の整理作業（平成21～23年度）

貝や遺物を含んだ土壌は、4tトラック17台分にも及び、機械等を使って水洗いするだけで1年以上かかりました。乾燥させた後に、ルーペやピンセットなどを使って①ヤマトシジミ、②オオタニシ、③その他の貝、④縄文土器、⑤石器、⑥骨、⑦その他など10種類に分類しました。細かい破片が多く、神経を使う作業でした。

この度、貝の同定がほぼ終わったことから、おぼろげながら見えてきた貝の利用実態や貝層出土石器等をご紹介します。

①出土した貝の種類

小竹貝塚の縄文人は多くの貝を採取していました。出土する貝（※1）は、ほぼ9割以上が汽水（※2）性のヤマトシジミです。

次いで、淡水性のオオタニシ・イシガイの割合が



青色：淡水性 黄色：汽水性 ピンク色：海水性

小竹貝塚から出土した主な貝

多くなります。海水性の貝はごく稀ですが、ベンケイガイ・フネガイ科の貝（サトウガイまたはサルボウガイ）など、海水性の貝の一部はその貝殻が貝輪^{（※3）}の素材として使われました。

膨大な量に及ぶヤマトシジミは、ムラで消費するだけでなく、加工品として交易された可能性もあります。出土した貝類や鯨骨、魚骨（クロダイ・スズキ・ボラ・サケなど）などから、小竹貝塚では水産資源にも恵まれた豊かな暮らしを送っていたと推測できます。

②貝輪素材としての貝殻の利用

縄文時代の装身具には、髪飾り・耳飾り・首飾り・腰飾り・腕飾りなどがありました。腕飾りとしては貝輪が最もポピュラーで、縄文時代には二枚貝の貝殻の一部に腕を通す穴を開けた単純な形の貝輪が多く作られました。



上段：ベンケイガイ
下段：サトウガイまたはサルボウガイ
小竹貝塚で製作された貝輪

小竹貝塚で貝輪素材とされたベンケイ

ガイ、サトウガイまたはサルボウガイも二枚貝です。ベンケイガイは外洋の細砂底（水深 3～20m）、サルボウガイは内湾の砂泥底（潮下帯^{（※4）} 上部～水深 20m）、サトウガイは外洋の砂底（水深 10～50m）に生息します。これらの貝は現在、台風や時化の直後に波打ち際に「死貝」として打ち上げられることがわかっています。縄文時代には、「死貝」の貝殻を採取するため、時期を見計らって海岸に出かけていたと考えられます。

- ※1 同定には、富山市科学博物館の協力を得ました。
 - ※2 海水と淡水が混ざった低塩分の海水。
 - ※3 貝殻で作られた腕輪。
 - ※4 干潮線（干潮時の海岸線）より下で、常に海中となる部分。
- 主要参考文献 忍澤成視『貝の考古学』同成社 2011年

③貝層から出土した石器

玦状耳飾^{（けつじょうみみかざり）}の製品や未成品が出土しました。貝層からは多量の剥片や石核、骨、骨角器なども出土しており、小竹貝塚の縄文人は貝製装身具（貝輪）だけでなく、石製装身具（玦状耳飾・垂飾りなど）、骨製装身具（骨製管玉など）といった多様な装身具を製作、使用していたことがわかりました。



左：製品 右：未成品

小竹貝塚出土玦状耳飾

この他、東北地方から北関東を中心に分布する押出型ポイント（石器）の模造品なども出土しています。

埋蔵文化財センターホームページ「小竹貝塚縄文レポート」どんどん更新中！
<http://homepage2.nifty.com/kitadai/odake/odakereport.htm>